

『正法眼蔵』「現成公案」の巻

平成30年5月第3週放送

どうげんぜんじ しょうぼうげんぞう げんじょうこうあん
道元禅師の名著『正法眼蔵』の巻頭を飾るのが「現成公案」の巻で
す。この巻は1233年に在家の弟子に説かれたものです。題名の「現成公
案」の「現成」とは実現し、成り立たせるという事。「公案」とは元々法
律用語で、けっさい はんけつ けつさい はんけつ
判決、判決を待つ未処理の案件の事。つまり「現成公案」とは
未処理の案件に対して私達は どう取り組むべきか という意味です。

私達の目の前に広がる世界は状況によって見え方が違うはずで
す。例えば 楽しいことや嬉しいことがあった翌日の朝と、悲しいことやつらいことがあ
った朝とでは、目覚めた時に広がる世界の見え方や感じ方が全く異なるとい
う経験をしたことはありませんか。

この事を道元禅師は、鳥は空に対して、魚は水に対して私達人間とは全く
違った見方や関わり方をしているのだという例えを挙げて説明しています。
自分の見たいように、自分に都合のいいように私達は目の前の世界を見て、
それと関わりを結んでいるにすぎないと道元禅師は説かれています。

限られた一生をどうしたらより良く生きることができるだろうか。道元禅
師は「ぶつどう なら こと じこ なら こと じこ なら こと
仏道を習うという事は、自己を習う事であり、自己を習うという事
は じこ わす じめ のつと
自己を忘れることである。」と示され、まず自分を仏道に 則った生き方
へとシフトさせていくよう説かれています。

しかし道元禅師は決してそこに じこ
留まることを許しません。私達は自分の身
近な人々のみならず、日々頂いている食べ物一つとってみても、直接的、間
接的に様々な人や物と繋がっています。つまり関係性の中で生きているので
す。それらに対しては、ただ受け止めているばかりでなく、こちらから働き

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

かけもしています。仏法に基づいて自分を見つめ直した上で、自分の目の前の世界との関わり方をどう変えていくべきかが更に大切となってきます。

そのヒントを道元禅師はこんな逸話^{いつわ}で伝えています。

中国^{とう}唐の時代に、扇^{おうぎ}をあおいで涼んでいた宝徹^{ほうてつぜんじ}禅師にある僧が「空気の流れはどこにでも存在していて行き渡らないところはないはずなのに、なぜ和尚様は扇をお使いになるのですか。」と尋ねると、宝徹禅師は「お前さんは、空気は常に流れているという事は知っているようだが、行き渡るという事の本当の意味を知らないようだ。」と答えて、扇で風を起こして見せたというのです。

より良い生き方の元、幸せの種は様々なところに落ちているはずですが、しかしそれらは拾われて^{はぐく}育まなければそこから芽は出てきません。私たちの目の前の世界は今のところついぞ変わり映えのしないもののように映るかもしれませんが、しかし、これからそれらにどう向き合い、どう働きかけるかによって世界は確実に変わっていくはずですが、仏法に基づいた自らの働きかけを通じて、目の前の世界とどう関わっていけばよいのか。「現成公案」の題名のごとく、未処理の案件は時時刻刻^{じじ ことごとく}とあなたの決裁を待っているのです。

— 終 —